

社会的水準の概念枠組と構造諸理論

梅 沢 孝

目 次

はじめに

1. 構造論的分析視角の今日的意義
2. 社会的水準の概念枠組の意味
3. 社会的水準の概念枠組と構造諸理論

結 び

は じ め に

前論文において、社会的水準の概念枠組を試論的に提示したのであるが、本稿は、それに基づく構造論を展開することを目的とする。社会的水準の概念枠組は、構造を成層（深層性）次元と序列（複雑性）次元の二つの方向に開示している。成層次元では、行為パターン——意識パターン——無意識の各層を設定し、また序列次元では、たとえば行為パターンでは、社会関係——組織——制度——体制の各水準を設定した。⁽¹⁾

社会構造は、原理・要素・連関の三つの側面をもっているが、それらは上述の社会的水準の各次元の相互関係のなかで論じられなければ、理論的に妥当な論議とはならない。たとえば、構造原理についていえば、社会関係の性質が集団や社会の構造原理となっていると考えられ、したがって社会関係の類型の数と同数の構造原理があることになる。構造原理は単一ではないのである。

前論文の社会分化論において、いわゆる下位社会（全体社会の第一次分化社会）を設定した

が、それは類型的に環節的分化社会（血縁社会、地域社会）と機能的分化社会（経済社会、政治社会、宗教社会など）および成層的分化社会（階級、階層）の三つに分けることができる。社会構造は当然これら三つの複合体として論ぜられなければならないはずで、単なる地域構造でも、分業構造でも、階級・階層構造でもないはずである。

このように現実の構造は、あらゆる面で複合的であるはずであって、そのことは社会的水準論と社会分化論に基づく構造論の構築によって論証されると思われる。

これに対して一般の論議は、単像的な傾向をもっていると思われる。とくに戦後の学界においては構造－機能主義が大きな潮流であったように、それは、機能（役割）原理という単独の、保守的原理に基づく構造論で、階級構造は階層構造のなかに解消しつつしたものとして理解されていた。しかしそれは、少なくとも現在の日本の社会の認識として客観的ではなく、また一面的にすぎる。最近の商業新聞の社説においてすらも、階級概念は現在の社会を分析するのに必要であるが、その「階級」は今日ます

ます見えにくくなっている、と指摘している。⁽²⁾
 まさにその通りであって、しかも社会学の任務は、表層的な社会現象の基底にあるものを、それが見えにくければ見えにくいほど、これを析出、明示することであろう。マルクス主義社会学の構造論は、もちろん階級論の立場に立ってはいるが、これもまた構造-機能主義とは正反対の一面的理論のゆえに、いわゆる外在批判にとどまりがちであり、十分な説得性をもちえないと思われる。

このような社会学の一面的な構造論の現状に対して、これを批判するとともに、社会的水準論と社会分化論に基づいて総合的構造論を試論してみようというのが、本稿の目的である。

1. 構造論的分析視角の今日的意義

ポスト工業社会論、ポスト社会主義社会論など一連の現代社会論の論ぜられるなかで、方法論においても戦後の構造論的分析視角がゆきわたった今日の学問的状况の下で、ポスト構造主義が記号論などの分野から主張されている。社会学についていえば、パーソンズを中心とする構造-機能主義分析に対する批判理論としてのエスノメソドロロジーや象徴的相互作用論や現象学的社会学などがこれに属すると考えられる。これらの理論は、反構造主義ではあるが、必ずしも構造論的視角そのものを直接否定するものではなく、構造以前の社会過程について、日常生活世界という視野から社会を問い直そうとするもので、社会的水準の成層次元に関わっている。しかも、序列次元の軸では、個人的水準の相互作用に焦点がしばられている。つまり序列水準が余り重視されていない。こう考えると、全体社会的水準についての体制的視角が見失われがちになり、そこから構造論的視角自体をも否定するにいたるのではないかという疑念が残るのである。このような学問的状况のなかでの

構造論的分析視角の展開は、時代錯誤であり、何らの理論的意義も期待できないのではないかと思われるかもしれない。しかし、竹内芳郎氏も指摘しているように、「60年代末から70年代にかけて、一時は構造主義がしきりに喧伝されたものの」未消化のままに推移してきたかもしれないし、そうでないとしても「表層のトップ・モード遷移の蔭に未解決のままあたかも解決済みであるかのように放置され隠蔽されてしまった論点」あるいは「知的競争からのいわば<落ちこぼれ>部分」があるかもしれないのである。⁽³⁾

それでは構造主義とは、どのような理論的立場を指すものであろうか。それは「関係はそれを構成する部分よりも重要である」という基本的思想に立ち、⁽⁴⁾「所与の瞬間ないし一定の期間、決定的なパターンや形状をつきとめること」⁽⁵⁾を目指している立場である。つまり社会事象における創発特性を重視し、それをパターンとして把握しようとする立場といっていよう。

このような考え方は、社会学の歴史の上でコント、マルクス以来のものであり、いわば社会学の伝統の一つといっていよう。ポットモアとニスベットによれば、それはフランスにおいてコントに始まって、ヴィーコ、デュルケームと伝えられ、さらにデュルケーム学派のモース、アルヴァクス、ラドクリフ=ブラウン、アナール派と続き、レヴィ=ストロースとピアジェに連なっている。またドイツではヘーゲルからマルクスへ、さらにテンニース、ジンメルと続いた。イギリスでもスペンサー以来であることは、その社会有機体説によっても明らかである。こうしてそれらの伝統が戦後の構造主義へと引きつがれてきたのである。⁽⁶⁾

しかしそうだからといって、構造論ですべてこと足りるというのではない。それは全社会事

象におけるいわば構造焦点論であって、構造主義と構造論的分析視角とは同一ではない。したがって、構造主義の克服すべき点を批判することによって、構造論的分析視角それ自体が否定されてはならないのである。この視角は、上述のように深く社会学的伝統に根差すものであり、それは社会的現実としての構造的現象の存在が否定しえないものであることの証しといっ
てよいであろう。ポスト構造主義の潮流の中でなされるべき理論的営為は、その批判点をくみこんだ、全社会理論における構造論の位置づけである。

それは、具体的にはどういうことを意味しているのであろうか。ボットモアとニスベットは、構造主義の特徴を (1) 諸個人の意図的行為の観点からの社会現象の分析を批判する反人間主義、(2) 歴史過程のはたらきという観点からの社会現象の分析を批判する反歴史主義、(3) その「構造」という用語は今日の社会学的分析における理論上の基礎概念となっていること、(4) 社会現象の「深層」の構造を析出すべきであるという主張の四点に求めているが、この中の少くとも後二者こそが構造論的分析視角の、今日の社会学が共有財産として活用すべき妥当な理論的特徴と考えられる。

構造主義において問題とされるべき点はいくつか。それは、前二者の反人間主義と反歴史主義であると考えられる。これらは科学哲学であって、社会現象についての一面的な見解である。社会現象としての「構造」は、「相互作用」に対して社会生活の安定化という意義をもっているが、そこには機能的安定化と逆機能的安定化という二面がある。前者を肯定する理論が、上述の構造概念不可欠論と社会の深層に横たわるものとしての構造論である。これに対して後者の逆機能には、社会関係の物神化や意思決定疎外の体制的構造化という人間疎外と社会の保守化

という事象が付きまとい、この逆機能面に対応する側面として反人間主義と反歴史主義の特徴が指摘されていると考えられる。つまり構造主義の理論は、後者の点で批判されるべきであるが、前者の主張をその主要内容とする構造論的分析視角が無視されてはならないのである。

構造論的分析視角の今日的意義の二つ目は、それが現代社会の分析にとくに適合しているということである。現代社会の基盤的特徴は、社会的価値の側面における商工業化社会であることと、それに関連して機能的側面における効率化⁽⁸⁾(メリトクラシー)社会であるということである。これらはいま、競争のゆきつく先としての序列社会(あきらめのシステム化)⁽⁹⁾をつくり出し、企業支配の社会(ガルブレイスの「大企業体制社会」)を現出し、情報処理技術の進展とともに管理社会の様相を深めつつある。

このような社会秩序の動向と相関的に、現代人、とくに現代青年の行動傾向を特徴づけて「楽天的ニヒリズム」ということがいわれている。それは「苦悩もないかわりに希望もない」世代とされる⁽¹⁰⁾。具体的には、多様化志向(ヒーロー不在、分衆化、価値多様化など)であり、体験主義(価値観の相対化)であり、現実主義であり、生活優先主義であり、好奇心が旺盛であり、就職意識(就社意識⁽¹¹⁾に対して)をもつにいたった世代とされる。つまり、あたかも自由闊達に行動しているようにみえるが、他面において政治に失望し、「あきらめのシステム化」とされる序列社会のなかで、ミーイズムに安息している世代なのである。

現代社会は、高度な科学・技術を基盤にもつ産業に支えられた豊富な、自由な、アメニティ社会が進行している。それは「苦悩のない」社会である。これは、現代社会の「見える」側面である。しかし、社会的に価値ありとされる、

共通の希望が「見えない」のである。つまり、希望のない社会である。考えてみれば「苦悩もないが希望もない」ということは、社会の基盤にどのような事態が進行しているのかが「見えにくい」、あるいは「見えない」ということからきているのではないのか。それは一般的に言えば、現代社会は過渡期社会であり、古いものが日々に形を失い、他面新しいものが芽ばえつつある社会だからといえよう。この意味では、現代は無構造的であるといっていよいであろう。しかし具体的には、個々の事情があると考えられる。

それでは、社会の基盤で進行していると考えられる何が見えないのか。まず、社会の全体像が見えにくい。つぎに、国家・行政区は見えるがコミュニティが見えない。エンプロイヤーとエンプロイーは見えるが階級が見えない。会衆は見えるが大衆が見えない社会である。さらに、豊かさ（フロー）は見えるが新しい貧困（心の貧しさ、ストック）が見えない。平準化は見えるが新しい階級構造化が見えない。新しい科学技術は見えるがその先の新しい危険（公害・環境破壊）が見えない社会である。つまり、この社会の行為主体と新しい社会問題が見えない社会なのである。

社会の全体像は、まずその骨組を把握し、それを思考枠組として、個々の現象的事象を理解し、アレンジすることによって結像すると考えられる。その社会の骨組が社会構造である。崩壊と新生のオーバーラップする過渡期社会では、一見、混沌としているようであるが、その混沌をもたらす構造的状況があり、構造的推移がある。それを析出することがこの時代の社会学の重要な課題であり、それを可能にするのが構造論的分析視角であると思われる。

また前述したように、この社会は、見えるものと見えないものが非常に対照的である。見え

るものは次々に推移していくが、見えないものは、何かが社会の基底に次第に堆積しつつあるように思われる。それがプラス評価のものかマイナス評価のものか、何れにしても、それが次代の社会の基盤を形成していくのである。それを事前に析出し、プラス評価の基盤をつくっていくことが、現代過渡期社会に生きるものの責務であろう。この課題は、社会の深層的視角からの、つまり構造論的視角からのアプローチによってはじめて可能であると思われる。このように、構造論は現代社会分析の重要なアプローチの一つであると考えられる。

2. 社会的水準の概念枠組の意味

既往の社会学理論において論ぜられている諸概念は、ほとんど全体社会のどこかの一側面の社会事象についてのものであることはいうまでもないであろう。しかし、社会本質論としての社会理論における「本質的事象」とされているものについての概念に対しても、これと同じように考え、その本質論は、実はその「本質的事象」とされているものを中核とした全体社会についての焦点論であったのではないかとし、ジンメル「個人的水準と社会的水準」の概念をもとにして構想されたものが前述の社会的水準論である。

このような焦点論と社会的水準論との基本的立場から、既往の主要な諸概念（事象）を検討した結果、まず個人的水準から識別された社会的水準は、さらに多くの序列的な層に分化していることが明らかになった。それは、ジンメルの後継者ヴィーゼによる社会関係・社会集団の諸水準であって、社会的水準の序列的次元といえるものである。つぎに、社会本質論的理論から明らかになったことは、これらの社会的水準が顕在的なものと潜在的なものから成り立っているということである。それらは、人間集合と

社会的水準の概念枠組

成層次元 序列次元		行為主体 レベル	行為レベル		意識レベル		無意識 レベル
			過程	パターン	過程	パターン	
個人的 水準	個人的水準	個人	社会的行為		個人意識 過程		
	相互作用的 集合的水準	複数個人	相互作用		集合意識 過程		
集団的 水準	社会連結的水準	相互作用 集合	相互作用	社会関係	集合意識 過程	相互期待	
	集団的水準	社会連結	相互作用	組織	集合意識 過程	共同目標	
全体 社会 的水準	下位社会的水準	集団	相互作用	制度	集合意識 過程	社会規範	
	全体社会的水準	下位社会	相互作用	体制	集合意識 過程	社会的価値	

行為パターン（制度）、行為レベルのものと意識レベルのもの、行為過程と行為パターン、意識過程と意識パターン、意識レベルと無意識レベルなどであって、この側面は社会的水準の成層次元といえるものである。以上を整理したものが上のような概念枠組図式である。

この概念枠組図式においてまず問題となるのは、下位水準と上位水準の社会事象の関係である。その第一は、構成要素と構成体との関係にあるということである。上位水準の社会事象は下位水準の社会事象をその構成要素として成立している。たとえば、社会連結（social relationship）は集団を構成し、社会関係（social relations）は社会組織の構成要素となっている。家族集団に例をとれば、行為主体レベルでいえば、夫婦、兄弟姉妹、父子、母子などの社会連結が家族集団を構成し、行為パターン・レベルでいえば、夫婦関係、兄弟姉妹関係、父子関係、母子関係などの諸家族関係が家族組織の構成要素となっている。

第二は、個と場の関係である。ここでも、家族集団に例をとれば、夫婦は子ども世代における兄弟姉妹や父子、母子などの社会連結が構成する家族集団という場のなかで、その生活、相

互作用が行われており、家族集団（むしろ家族社会というべきであろうが）がその夫婦連結を可能ならしめているとともに、その在り方に影響を与えているし、また逆に、その影響をうけていると考えられる。

ギョルヴィッチは一般社会学の諸問題として、(1)深層を「掘りさげる」社会学、(2)三つの基本的な社会学のレベル、①微視社会学（社会的交渉の諸形態の類型学）、②分化の観点からみた集団の社会誌学、③全体社会の類型学をあげている。⁽¹²⁾そして、社会の現実としてのこの深成部は次のような諸階層レベルからなっている。(1)形態学的かつ生態学的表層、(2)社会組織あるいは組織された上部構造、(3)社会的範型（パターン）、(4)いくらか規則性をもつが、組織された上部構造以外の場所で展開される集合的行為、(5)社会的役割の網の目、(6)集合的態度、(7)社会的シンボル、(8)人々を熱狂させ、革新や創造に導く集合的行為、(9)集合的理念と価値、⁽¹³⁾(10)心理的状况および集合心理的現動などである。

つまりギョルヴィッチは、社会を深層的な成層次元（表層から心理的状况および集合心理的現動まで）と、序列次元（社会的交渉、集団、全体社会）とからなる多元的な存在だとして、

その諸次元の矛盾・対立のダイナミックスを捉えようとした。彼があげた社会的水準の成層次元の10層は整理する必要があるが、大体においてパターンイズした集合的行為を上部に、意識や観念的事象を下部に構想しているといえよう。いずれにしても、本稿における社会的水準の成層次元とは、このような、社会の深層的構成を意味している。

パーソンズは、一般に大学制度という用語で、集合水準としての大学と制度水準としての財産とが混同されていると指摘しているが、それは何も制度にかぎらない。集団と組織との関係も同様ではなかろうか。たとえば、社会関係とは「一つの機能的単位をかたちづくったもの⁽¹⁴⁾」とし、その「社会関係がいくつか複雑にからみ合ってより高次の機能的単位をなしたもの⁽¹⁵⁾」を集団とする見解がある。社会関係の複合は社会組織であり、それは社会集団の内部に存在する事象である。⁽¹⁶⁾つまり、人間集合と行為パターンとははっきり識別すべきである。そして、人間集合という表層的事象の深層的事象として行為パターンを想定しているのが、社会的水準の成層次元の構想である。それはさらに、行為パターンのより深部に意識パターンがあるとしているのである。

さいごに、この概念枠組図式の全体的意味について述べておかなければならない。まず序列次元に関係することであるが、この概念枠組図式は、社会関係——組織——制度——体制という序列シリーズにおいて、相互依存関係のシステム原理の立場をとってはいない。ここにおける社会関係は、対立・矛盾・支配関係も社会構成の有力な要素としてその存在を認めているし、体制も、その内部に対立・闘争を含んだものと考えている。ただし常態においては、結合関係優位の下における対立・闘争関係の存在という構想である。

また成層次元に関係することであるが、過程とパターンの関係は、過程→パターンという一方向的なものではなくて、パターン→過程という変化もあると考えられている。このようなものとしての概念枠組図式から、次に構造概念を究明することにする。

3. 社会的水準の概念枠組と構造諸理論

概念枠組図式における構造概念を考察するにあたって、まず主要な社会構造論の類型を検討してみよう。そのひとつの手掛りは、前稿で言及したブラウの社会構造論の三類型論である。⁽¹⁷⁾

ブラウによれば、社会構造についての既往の類型は次の三つに分けられる。第一の知的イメージは、社会構造を「社会関係の布置連関」とする見解で、グード、コールマン、ホマンズ、マートンらの理論をこれに属するものとしている。この見解の核心的イメージは「布置連関⁽¹⁸⁾ (configuration)」である。第二は、社会構造を「社会生活や歴史を形作る基層」とする見解で、レヴィ＝ストロース、マルクス、パーソンズ、リブセット、ボットモアらの理論をこれに属するものとしている。⁽¹⁹⁾その核心的イメージは「基層 (substratum)」である。⁽²⁰⁾第三は、社会構造を「社会またはその他の集合体における人間の分化された社会的位置の多次元にわたる空間」とみる見解で、ブラウ、コーザー、レンスキらをその代表としている。⁽²¹⁾このイメージは「分化 (differentiation)」をその核心としている。⁽²²⁾

およそ類型論では、分類しようとする事象の側面と、そこにおける分類の基準が明示されなければならないが、ブラウはそれを示していない。以下、ブラウが分類した三つの構造概念の類型を検討批判することを通じて、本稿における類型論を提示してみよう。

まずブラウの第一の構造概念の類型は、構造

それ自体の構成の側面に関するもので、その分類基準は、その形態が複要素の構成の形態、つまり多元論的形態なのか、一元論的もしくはゲシュタルト的形態なのかということである。前者は「布置連関」としての構造概念で、いわば構成的構造論である。これに対して後者は、ゲシュタルト的構造論である。この類型論からブラウの見解を批判すると、すでに明らかなように「布置連関」構造論と対をなす構造論の類型は「ゲシュタルト」構造論でなければならない。この対比は、社会的に重要な意味をもつものであって、ゲシュタルト的構造論からは社会変動論は出てこないと思われる⁽²³⁾。この二つのタイプの構造概念は、二者択一のものとせず、社会的水準の成層次元で、位置を異にするものとして配置すれば矛盾はしないし、複雑な現実の社会構造の分析概念装置として、適切とも考えられる。つまり、ゲシュタルト的構造概念を基層におくのである。いうまでもなく、この類型に入る構造論はレヴィ=ストロースのそれである⁽²⁴⁾。いずれにしてもこの類型論は、構造を、諸要素（下位水準）の構成（上位水準）とする構成的構造論をとるか否かに関わる点で、概念枠組図式の序列次元の側面の理論である。

これに対して、ブラウの第二の構造概念の類型は、概念枠組図式の成層次元の側面に関わるもので、その分類基準は単層——多層である。つまり概念枠組による構造的現象の層は、行為パターン・レベル、意識パターン・レベル、無意識レベルの三層であるが、これらの中の一つを構造とする見解が単層構造論であり、二つ以上の層をもつとする見解が多層構造論である。

そもそも、ブラウにおける「基^{サブストラタム}層」という概念には、現象に対する本質という意味と、全体構造内における上部構造に対する下部構造という意味が含まれているようであるが、前者は基層というよりもむしろ現象の「骨組」とい

うべきで、実はこの「骨組」概念こそ「構造」概念そのものというべきものである。こうして、後者の意味の基層概念こそが構造概念の理論に関連するものと考えられる。つまり、基層とは表層に対する基層であり、これは構造概念論における「表層——基層」という二層論を主張するものである。さらに、この二層論をより一般化して多層論とするとき、論理的にはそこに単層論——多層論という類型論が成立する。そして基層論は、多層論の一特殊論なのである。なぜなら、多層論にはさらに、各層間の影響関係の側面が考えられる。この側面に着目すると、そこに決定論——均衡論（二層論のばあい）か、決定・媒介論——均衡論（三層論のばあい）という類型論が考えられる。つまりその分類基準は、各層間の影響関係が決定ないし決定・媒介関係なのか、均衡関係のなかである。こうして、多層論はさらに、(1)均衡論的多層論、(2)決定論的多層論、(3)決定・媒介論的多層論に分かれる。そして、基層論が(2)ないし(3)に分類されることはいうまでもない。基層概念には表層に対する規定作用をもつものという意味が含まれているからである。

さいごに、第三の構造概念の類型は、構造概念の意味内容それ自体に関係するもので、その分類の基準は、構造を社会事象の中核的なものとみるか否かであって、中核論的構造論と非中核論的構造論との二類型に分類される。前者は一般的であり、ブラウらが属する「社会分化」の観点に立つこの第三の類型はいうまでもなく、ギュルヴィッチの諸次元の社会事象の構成を構造と考える立場も後者に分類される。後者の概念の特徴は、社会分化している人口（人間集合）をも構造の要素としている点で、この点でそれは、構造を人間集合の中核にある本質的なものとしていない。それは単なる構成論であって、構造論ではない。構造論の基本的視角

は、近代社会学以来の伝統となっている社会関係——組織——制度のシリーズにみられる、個人を社会的空間に布置するものとしての社会的骨組こそ、外在性と拘束性をもって社会を社会たらしめている、という構想であろう。以上の論議を整理すると次のような図式ができ、既往の構造理論を分類できる。

構造の類型論図式

(A) 上位類型



タイプⅠ＝構成・複層論

タイプⅡ＝構成・単層論

タイプⅢ＝ゲシュタルト・単層論

〔(注) ゲシュタルトは無意識層だけ。したがってタイプⅣは論理的にありえない。〕

(B) 構成・複層論(タイプⅠ)の下位類型



タイプⅠ-1＝決定・三層論

タイプⅠ-2＝決定・二層論

タイプⅠ-3＝均衡・二層論

タイプⅠ-4＝均衡・三層論

〔優位劣位関係などによる細分化は略。〕

(C) 構成・単層論(タイプⅡ)の下位類型

タイプⅡ-1＝行為パターン構造論

タイプⅡ-2＝意識パターン構造論

このような構造諸理論の類型論は、社会的水準の概念枠組においては、どのように意義づけられるであろうか。まずこの類型論の二つの軸のうちの「構成論——ゲシュタルト論」は、水準の序列次元に関連していると考えられる。この次元は社会的水準の「複合性」を意味するものであり、上位序列の水準ほど複合性が高度化している。つまり、上位の水準は下位の水準の事象を順次その構成要素として構成されているのである。したがってゲシュタルト論は社会的水準論においては、ある特定の水準だけを認めるという特殊な理論ということになる。

第二の「単層論——複層論」の軸が水準の成層次元に関連していることは明白である。この次元は水準の「深さ」を意味するものであり、上述のように構造的な事象として、行為パターン、意識パターン、無意識の三つの層が設定されている。

上野千鶴子氏は、近著『構造主義の冒険』(1985)の中で、デュルケームの聖と俗、レヴィ=ストロースの「考えられた系」と「生きられた系」など多くの構造論における「層」を整理して、「聖と俗」についての宗教学的アプローチの概念を使って、カオス・コスモス・ノモスの三層とし、それらの考える組み合わせによって、次のような構造論の類型を示している。(1)ノモス/コスモス+カオス、(2)コスモス/ノモス+カオス、(3)カオス/コスモス+ノモス、(4)カオス/コスモス、(5)コスモス/ノモス、(6)ノモス/カオス、(7)カオス/コスモス/ノモスの七つである。(1)から(6)までは二項対立であるが、(7)だけは三項対立で、これを完成された構造論とし、バーガーの理論がこれに当たるとしている。バーガーの理論はカオス＝無秩序、コスモス＝聖秩序、ノモス＝俗秩序と内実化されているが、これは社会的水準論からすれば、それぞれ無意識/意識パターン(聖)/行為パター

ン（俗）と読み換えることができよう。⁽³¹⁾つまり上野氏の類型論は、社会的水準の成層次元に関連する議論である。

以上、構造概念の類型論を社会的水準の概念枠組の中に位置づけたが、さいごに、これを前提にして主要と思われる構造諸概念を社会的水準論の視角から意義づけることにする。

マルクスは社会を、土台とそううに構築されている上部構造とから成る構成体であるとするその社会構成体の理論⁽³²⁾によって、現代的な構造論の創始者となっているといつてよいであろう。この理論は、全体社会の構造論的イメージを明確に示している。

マルクスにおいて、まずその土台は経済構造とされ、それは分業関係や所有関係からなる生産諸関係の総体とされる。つまり土台構造を、社会的水準の社会関係レベルでとらえている。さらにマルクスは、社会構成体を経済制度、政治・法制、社会的観念諸形態の構成という、社会制度レベルでとらえている。これは用語としては、「構成」を意味する Formation を使っているが、理論の内容は、以上のように、社会を制度や観念体系の構成体、つまりその骨組によってとらえている点で Struktur である。したがって、社会構成体 (Gesellschaftsformation) 概念に、集団という人間集合が含まれていないということは当然である。

つぎに社会的水準の成層次元の側面で、まず物象化論がある。それは人間疎外の視角からの論議となっているが、構造論的には相互作用の逆機能的構造化を論じていることは明らかである。

また社会構成体概念は、上述のように上部構造と土台（経済構造）からなっているが、その上部構造はイデオロギー（社会的観念諸形態）と政治・法制とからなり、それらは、それぞれ社会的水準論における意識パターンと行為パター

ンである。さらに経済構造は土台、つまり上部構造に対する基層と考えられている。そしてこの基層としての経済構造は、上部構造の現象形態に対する本質とされ、また政治は経済の集中的表現⁽³³⁾であると考えられている点などから、これを「無意識」レベルの事象と読み換えることができる。⁽³⁴⁾さらにこのイデオロギー、政治・法制、経済構造は、表層——媒介層——基層という重層的決定構造的三層構造⁽³⁵⁾ととらえることもできよう。

さいごに、社会構成体論は、生産力の発展にともなう土台と上部構造との矛盾と照応という、内在的変動原理を含んでいる。つまり構造変動論を内蔵している理論となっている。このように、マルクスの社会構成体論の中には、今日、構造論において問題となっている多くの側面が論ぜられており、現代的構造論の創始理論とするのにふさわしい理論である。

マルクスの社会構成体論が近・現代的構造論の創始理論であるとするならば、近代社会学において構造論を確立した理論は、デュルケームが『社会学的方法の基準』において論じた「集合表象（理想と規則）」の理論と、『宗教生活の原初形態』に集大成された「聖と俗」の理論であろう。少なくともデュルケームのそこにおける思索は、聖（理想、価値体系）を基層とし、俗（規則、制度）を表層とする決定論的二層論（タイプⅠ－２）で、これは社会的水準の成層次元の側面における構造論である。序列次元の側面では、それが社会制度、社会的価値を論じている点で、全体社会レベルの構造論であるといふことができる。

つぎにその構造変動の問題であるが、従来は静態論的であるとするのが通説的解釈であったが、近來、その『宗教生活の原初形態』における「集合的沸騰の理論」に注目することによって、そこに構造変動の理論が内蔵されていると

する説が有力となってきたようである。⁽³⁶⁾

デュルケームの聖俗論によって出発した構造の二層論は、上述のようにマルクス理論の中にすでに含まれていたと解釈できる三層論へと展開されていく。それは実体論的な「無意識」層の提示である。その先駆は周知のようにフロイトの精神分析学であるが、社会的水準の成層次元の側面におけるこの「無意識」レベルは、必ずしも精神分析的な実体としての無意識に限定されていない。それは行為パターン、意識パターンという、構造の成層における最下層としての基層であり、「日常生活において、それが規定力をもっているにもかかわらず、そのことが一般的に当事者によって意識されていない事象」という、包括的カテゴリーである。マルクスの「経済的土台」もこれに含まれることはいうまでもない。

デュルケーム学派につらなるレヴィ＝ストロースは、自らの構造主義の源泉をマルクス主義、地質学、精神分析学の三つにあるとしているが、⁽³⁷⁾上野千鶴子氏によれば「この三つはいわば彼の考え方の揺籃をなすものであって、さらに意識的なレベルでは、フランス社会学派と構造主義言語学と精神分析学を挙げるのが、今日では公認になっている。」⁽³⁸⁾このレヴィ＝ストロースの思索へのマルクス（上部構造と土台）と精神分析学（意識と無意識）と構造主義言語学（原型）との影響は、彼の無意識レベルにおける構造論として結実したと思われる。それは彼自身、構造とは無意識であり、構造法則であり、したがって象徴機能そのものであるといっているところに、端的に示されている。⁽³⁹⁾またこの点を川田順造氏は、レヴィ＝ストロースは「当事者によって『意識されない構造』に高い評価を与えている」といっている。⁽⁴⁰⁾つまり、レヴィ＝ストロースの構造概念は明らかに、象徴体系＝意識パターンではなく、無意識レベルの

概念である。

マルクスによって創始された構造論が、近代社会学において、デュルケームによって社会的水準の成層次元の側面で、多層論として展開されたとするならば、その序列次元の側面を確立したものは M. ウェーバーであるといえることができる。

まず、周知のようにウェーバーは、社会的行為論の確立者であるが、社会的行為概念が構造の序列次元の礎石となっていることは、上位の各水準の構造的把握が、社会的行為の「チャンス」概念によって構想されているところに明示されている⁽⁴¹⁾と考えられる。

またその官僚制論は、集団レベルにおける構造論（組織論）を確立したといえる理論であり、さらにその合理化史観にみられる官僚制支配社会論は、時代批判的構造分析論であるが、その中に全体社会レベルの構造論をみることができよう。

さいごに、ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の論議にみられる伝統的支配制度の危機と革命力としてのカリスマの発動（カルヴィニズム）による合法的支配制度への移行論、その合理化史観にみられる合法的支配制度の危機論は、ウェーバーの構造変動論を示すものといえることができる。⁽⁴²⁾

構造の現代的理論は、少なくとも社会学においては、パーソンズによって確立されたといえるであろう。彼がデュルケーム、M. ウェーバー、パレートらの総合的研究によって、その社会学理論の基礎を築いたことはよく知られたことであるが、そのことは、以下に述べるように、その構造論にもよく示されている。

パーソンズが現代構造理論の確立者である理由は、まず、彼が構造概念の本質を明示している点である。たびたび指摘しているように、彼は人間集合と制度とを峻別して、後者こそが構

造的事象であるとする。それは、構造とは人間集合（社会）の骨組であるという認識であるといつてよい。第二に、彼は社会的水準における成層次元と序列次元の両側面の構造論を総合的に展開しているということである。第三に、構造要素と構造連関とによる構造論を構築していることである。

その成層次元の側面における構造論は、行為パターン・レベル（役割構造）と意識パターン・レベル（社会規範、社会的価値）の主意主義⁽⁴³⁾の決定二層論（タイプⅠ—2）である。それは、デュルケームの「聖と俗」の二層論をうけついでいる。また、序列次元の側面においても、個人レベル（相互行為論）、集団レベル（地位・役割構造論）、社会レベル（制度論）という、すべての序列水準における構造を論じている。これはウェーバーをうけついでいるといえよう。

しかし、パーソンズにおける構造論の限界は、よく指摘されているように、その構造変動論の欠如である。その理論的原因是は、彼の構造原理が、役割構造論や機能領域論にみられるように、分業原理を自明の本質的なものと考え、したがって、それを唯一のものとしている均衡論にあると考えられる。

このパーソンズの構造論の限界を批判して、全体社会を「動く全体」としてとらえ、社会構造を各社会的序列の一時的均衡と考え、その動態を構造化——脱構造化——再構造化・爆発とする変動論的構造論を主張したのがギェルヴィッチである。しかしその構造論は、社会的水準の序列次元と成層次元の二側面から、構造的事象だけでなく、すべての事象を網羅的に構造要素としてとり入れている点で、構造の静態的イメージは余り明確ではない。

結 び

以上、主要な構造諸理論と構造諸概念との社会的水準の概念枠組における配置と意義づけを試みた。それは、既往の理論や概念の水準論的検討を通じての、水準論的構造論の成立可能性を示したものであった。従って次の課題は、この構造論の具体的な展開である。以下そのいくつかの主要な論点の素描によって、結びのことに代えることにする。

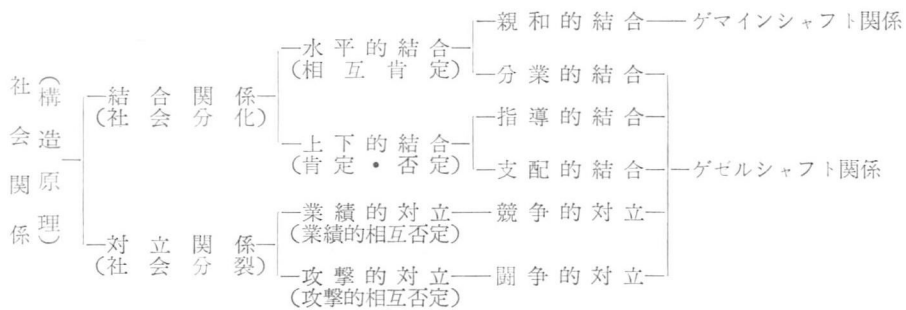
まず、概念枠組の序列次元の側面から構造論を検討してみよう。社会的水準論において序列的位置関係をきめる基準は、恒常性（非恒常—恒常）の他に、ミクロ—マクロ性、複雑性（単純—複雑）、包括性（非包括—包括）、「個—場」関係性であった。⁽⁴⁴⁾このうちの後三者に注目すれば、水準論の立場からする構造論は、まず構造要素論の側面をもつ。つまり、ある序列的位置における水準の構造は、必ずその直近下位の水準の構造的事象をその構造要素としていることになる。逆にいえば、その構造要素の連関が上位の構造を成立させている。その連関においては、必ずその連関特有のなんらかの原理が作用していなければならない。つまり、水準論における構造論は、内部論理的に構造要素、構造原理、構造連関という側面をもっているのである。これは水準論における構造の三つの公準的な分析視角といつてよいであろう。濱島朗氏⁽⁴⁵⁾はこのことを明確に指摘している。また、パーソンズの構造論がこの分析視角に基づくことはいうまでもないが、彼はその社会システム論の立場から、自明のこのように、構造原理を分業原理、構造要素を役割、構造連関を均衡としているのである。

このように、社会的水準論における構造論には、三つの公準的視角があるが、まず構造原理について述べれば、それは最下位水準の構造事

象である社会関係の諸形態がもつ属性が、上位各水準の構造事象における構造原理となつていふと考えられる。つぎに構造要素は、構造原理に対応する下位水準の構造事象である。要するに、構造原理が異なれば、構造要素も異なってくる。このことは構造連関についてもいえるのであって、連関の様態は構造原理に対応して決定されている。

以上を前提にして、具体的な構造論を素描す

社会関係（構造原理）と社会分化関連図式



(注)〔松本潤一郎は、親和的は党同的ないし共力的、
支配的は搾取的と呼称している。〕

このように、現実の社会生活は相親和し、補い合い、指導・学習し、支配・服従し、競争し、あるいは社会生活そのものを崩壊させるかもしれない、また現在の社会構造を変革するかもしれない闘争をしているという、さまざまな社会関係によって構成されている。しかしその常態における優越的社会関係は、高田保馬が指摘しているように、結合関係である。つまり、結合優位複数原理の視角が現実的であり、かつダイナミックな社会構造の把握となると思われる。

つぎに構造要素論は、それぞれの構造原理に対応して、それぞれの構造要素が析出できるが、これらに共通しているのは社会的地位という事象である。役割構造論では地位＝役割が前提になっており、構造＝地位構造＝役割構造という構想であった。⁽⁴⁷⁾しかし、この構想は現実的ではない。構造とは、一般的には地位構造であ

れば、まず構造原理においては単独原理の立場をとらない。パーソンズの構造論に典型的にみられる静態的構造論は、分業原理のみを認める理論といってよいであろう。それが地位＝役割構造論である。社会関係（構造原理）は、現実の社会分化と無関係ではありえない。それは社会分化論と松本潤一郎の社会関係論とに依拠すると、次のように整理できよう。

るが、その地位は、具体的には社会関係の諸形態に対応して、親和的地位、分業的地位、指導一被指導的地位、支配一服従的地位、競争的地位、闘争的地位などである。

さいごに構造連関であるが、上述の各地位がそれぞれ親和的、分業的、指導一被指導的、支配一服従的、競争的、闘争的地位連関によって、それぞれ親和構造、分業構造、指導構造、支配構造、競争構造、闘争構造を構成し、それら各構造が、その時代ごとの生産力状況と文化状況との構造与件のもとで、各構造連関の間に優劣の変動はあるが、一般的には、結合的構造連関優位の複合構造を構成していると考えられる。この複合的構造連関の結節点が複合的な社会的地位であって、したがってこの複合構造は、一般的には結合的地位連関優位の複合構造といい代えてもよい。

つぎに、概念枠組の成層次元から構造論を検

討してみよう。この軸における重要課題は構造化と規定関係であろう。しかし本稿では構造の構成を論ずるのが主眼であるため、後者についてだけ述べることにする。

上述で示したように、この軸では行為レベル、意識レベル、無意識レベルの順に布置してあるが、それは客観的に認められる、事象の存在形態としての顕在性（上層）—潜在性（下層）という基準に従った布置である。しかし現実には、この他に、事象の発生経過における従属性（上層）—本源性（下層）という基準と、影響力関係における方向・軌道・枠づけ（上層）—規定づけ（下層）という基準があり、内実的構造論を展開するには当然後者の基準を論じるべきで、他の二つの基準もそれが意味をもつためには、最終的にはこの領域で論じられることになるだろう。

このような位置関係の論議では、すでに構造が重層的構成の側面をもっていることを前提にしている。事実、デュルケーム以後多くの構造論は、聖・俗論にみられるように二層論であるが、決定論的三層論が完成された構造論ではないかと考えられる。

それは、近・現代的構造論の創始者であるマルクスの社会構成体論のなかに、少くとも内含されていたと考えられる⁽⁴⁸⁾、観念諸形態／政治・法制／経済的土台という決定論的三層構造論である。この構造論は、周知のように生産力と経済的土台（生産諸関係）との矛盾に起因する、経済的土台と上部構造との弁証法的変動論をもつという点で優れている。

他方、人類学的構造論の集大成者の地位を占めていると思われるパーガーも⁽⁴⁹⁾、ノモス／コスモス／カオスの三層論の立場をとり、それぞれに順次、俗（規範秩序）、聖（宗教的世界）、混沌（神の創造の対象）の内実を与えている。しかしパーガーの三層論は、混沌を「聖なるもの

（コスモスの構成者）の最古の敵対者⁽⁵⁰⁾」として貶価的にとらえ、宗教的世界中心の、つまり観念偏重的な構造論となっている。

三層論の妥当性の理論的根拠としては、普遍的な事実として、社会事象には行為レベル、意識レベル、無意識レベルの三層の存在が指摘され、また神学的領域においても、これに対応して上記のような三層が措定されていることが挙げられる。

この三層論を、影響力関係の方向づけ（上層）—規定づけ（下層）の位置基準で整理してみると、行為レベルを媒介（中間）層⁽⁵¹⁾として、その上層に、方向づけの影響力を及ぼしている意識レベルが布置され、その下層に、規制づけの影響力を働かせている無意識レベルが布置されることが、いちおう妥当と思われる。つまり、意識レベル／行為レベル／無意識レベル、あるいはコスモス／ノモス／カオスという布置である。

しかし、方向づけ＝意識レベルと規定づけ＝無意識レベルという対応は妥当と思われるが、行為レベルの事象のすべてが媒介事象に局限されているかどうかについては検討されなければならない⁽⁵²⁾。

また次の問題は、無意識レベルという概念の「無意識」の意味で、これは前述したように、精神分析学の措定する実体的無意識だけでなく、「当事者が一般的に意識していない」という意味をも含めて、つまり基層的事象とするのが妥当であろう。従って、このうちのどちらの事象をとるか、あるいは両者をともに複合的にとるかの選択が残される。

これらの問題についての考察は、構造与件論に関連し、稿を改めて論じなければならない。

(1986. 1. 9)

〔注〕

- (1) 梅沢 孝「現代社会の領域論的分析視角試論」
 (『明星大学・社会学研究紀要』, 第5号掲載)。
 ただし、構成次元という呼称を、本稿では成層次元と改めている。
- (2) 朝日新聞社の社説は「社会党新宣言づくりへの注文」という題目で、「階級という概念は……もともとは十九世紀の西欧社会の現実から導出された概念だが、現代の社会を分析するのにも、重要な一つのものの見方といえよう。」といい、「現在の日本の社会は、中流意識の拡大、高等教育の普及といった条件も加わって、ますます『階級』が見えにくくなっている。」(1985年9月14日付)と指摘している。
- (3) 竹内芳郎「現代哲学思潮への一発言——現象学・構造主義・ポスト = 構造主義——」(『思想』1984年第4号, pp. 96上—97上)。
- (4) T. ボットモア/R. ニスベット, 富田正史訳『社会学における構造主義』, p. 11。
- (5) 同書, p. 8。
- (6) 同書, pp. 97—98。
- (7) 廣松渉氏は丸山圭三郎氏との対談で、次のようにいっている。「私どもは『関係主義的』な存在観を採るわけで、そのかぎりでは、構造論的発想そのものは積極的に評価するわけです。しかし、それは人間ぬきの構造主義ではない。」(『対談・文化のフェティシズムと物象化』(『思想』1985年第4号, p. 9上, 傍点筆者)。
- (8) 廣松氏は丸山氏との上記の対談で、「今日の先進資本主義社会」は「商品経済のまさに極限みたいな状況に」なっており、「物象化」が非常に甚だしくなっている、といっている(『同書』pp. 6—7)。
- (9) 貶価の意味の学歴社会、偏差値教育体制は、まさに「あきらめのシステム化」といってよいだろう。
- (10) 劇団「第三勢力」主宰者・鴻上尚史の指摘(朝日新聞「ハッピー・ニッポン」, 1985年7月9日朝刊)。
- (11) 同紙, 同特集記事(1985年7月30日朝刊)。
- (12) ギュルヴィッチ, 寿里茂訳『社会学の現代的課題』, pp. 14—15。
- (13) 同書, p. 9, 目次 p. iii—iv。
- (14) 日本社会学会編集委員会編, 『現代社会学入門〔第2版〕』, pp. 14—15。
- (15) 同書, p. 18。
- (16) 高田保馬『社会学概論』, p. 235。
- (17) Peter M. Blau, ed., *Approaches to the Study of Social Structure*, 1975, pp. 1—20., M. ブラウ編, 齊藤正二監訳『社会構造へのアプローチ』, pp. 1—27。
- (18) *ibid.*, p. 10, 訳書, p. 14。
- (19) *ibid.*, p. 11, 訳書, p. 16。
- (20) *ibid.*, p. 10, 訳書, p. 14。
- (21) *ibid.*, p. 14, 訳書, p. 19。
- (22) *ibid.*, p. 10, 訳書, p. 14。
- (23) 未開社会研究の概念装置としては、必然性があるといえよう。
- (24) 上野千鶴子『構造主義の冒険』, pp. 191—94 参照。
- (25) ブラウは次のようにいっている。社会構造の構成「諸部分とは、男性と女性、人種集団、社会経済的階層といったような諸々の集団とか階級のことである。」「要するに、私は社会構造によって、さまざまな線に沿う諸々の社会的位置間の人口分布について言及しようと思う」(Blau, *op. cit.*, pp. 220—21, 訳書, pp. 335—36, 傍点筆者)。
- (26) 上野千鶴子『前掲書』, p. 32。
- (27) 「/」の記号は「対立」を意味し、「+」の記号は「一括」を意味している。
- (28) 上野千鶴子『前掲書』, pp. 40—41。
- (29) 「カオス」概念には、少くとも宗教学的アプローチにおいては二つの意味(本来の神か反秩序的な神)があるとされる(『同書』, p. 39)。なお、バーガー, 蘭田稔訳『聖なる天蓋』, p. 182 参照。
- (30) ウェーバーの正当の支配のダイナミックスについても、純粹カリスマ的支配→カリスマの日常化→純粹伝統的支配ないし純粹合法的支配という概念図式として解釈でき、純粹カリスマ的支配は巫制度レベルの仕事、他の三つは制度レベルの仕事とされているが(佐藤嘉一「カリスマと官僚制」(森博, 矢沢修次郎編『官僚制の支配』, pp. 60—66), バーガーの構想は、このウェーバーのものに類似している。しかし、ウェーバーの方が、カオスに積極的意義を与えている。
- (31) 「カオス」を「無意識」と読み換える論拠については、上野千鶴子『前掲書』, pp. 34—35, pp.

- 38—39, p. 53, p. 230 を参照。
- (32) マルクス, 向坂逸郎訳「経済学批判」(大内兵衛, 向坂逸郎監修『マルクス・エンゲルス選集7』), pp. 53—56。
- (33) レーニンは、物質的社会関係(経済的構造)は自然発生的にできた社会関係で、イデオロギック的社会関係(上部構造)は意識的につくった社会関係である、といっている。(レーニン「人民の友」<『全集』第一巻>, p. 145, pp. 132—33.)
- (34) ここでいう「無意識」とは「当事者が一般的に意識していない状態」という意味。
- (35) 早瀬利雄は「総体としての社会生活の循環過程の分析」という課題は、経済的生産体系と政治的支配体系と文化的適応体系の間の構造連関の分析を意味しており、そこにこそ社会科学の最も中心的な基本問題が認められる。」「(体制論における経済と社会」<『帝京経済学研究』第十巻第一・二号合併号>, p. 126)として、重層的決定論の三層構造論の立場をとっている。
- (36) デュルケーム, 山田吉彦訳『社会学と哲学』, pp. 206—207, およびデュルケーム, 古野清人訳『宗教生活の原初形態』(下), pp. 341—44 参照。
- (37) レヴィ=ストロース, 川田順三訳『悲しき熱帯』, (世界の名著59『マリノフスキー/レヴィ=ストロース』), pp. 399—400。
- (38) 上野千鶴子『前掲書』, p. 185。
- (39) レヴィ=ストロース, 『前掲書』, pp. 224—25。
- (40) 川田順造「人類学の視点と構造分析」(レヴィ=ストロース『同書』), p. 438。
- (41) M. ウェーバー, 阿閉吉男訳『社会学の基礎概念』。
- (42) 森博, 矢沢修次郎編『前掲書』, pp. 60—66。
- (43) T. パーソンズ, 佐藤勉訳『社会体系論』, T. パーソンズ, E. A. シルス, 永井道雄他訳『行為の総合理論をめざして』。
- (44) 梅沢孝「前掲論文」, p. 10。
- (45) 濱島朗「階級構造と階級区分」(富永健一, 倉沢進編『階級と地域社会』), pp. 7—10。
- (46) 松本潤一郎『集団社会学原理』, pp. 301—75。
- (47) たとえば、パーソンズは次のようにいっている。
「社会体系のもっと巨視的な分析のたいがいの目的にとっては、行為よりも高次の単位、つまりそこで地位—役割(status-role)と呼ばれる単位を利用するのが便利である。」「いくつかの地位と役割、つまり地位—役割群(status-role bundle)は、……社会体系の単位なのである。」(パーソンズ, 『前掲書』, pp. 32—33.)。また同頁で、地位と役割とは互換的な概念で、ただ前者は社会体系における行為者の位置を示し、後者は他の行為者に対する志向を示しているにすぎない、としている。
- (48) 早瀬利雄「前掲論文」参照。
- (49) 上野千鶴子『前掲書』, p. 54, pp. 138—54 参照。
- (50) パーガーはその著書『聖なる天蓋』(蘭田稔訳)の中で次のようにいっている。「より深い次元で神聖はもうひとつの対立範疇、すなわちカオスの範疇をもっている。聖なるコスモスはカオスから生じ、その恐ろしい相手として後者に直面し続ける。」(p. 40, 傍点筆者)。
- (51) ここで媒介(中間)層とは、下層に対して方向づけ、上層に対して規定づけをする層のことである。
- (52) たとえば、政治・法制は方向づけ的作用をする事象として上層へ、経済構造は規定づけ的作用をする事象として下層へ布置する。

(うめざわ たかし, 本学教授)